



困難を逆手にとって

松本 侑壬子・ジャーナリスト

イランのジャファール・パナヒ監督は、つくる映画がほぼすべて国際映画祭で受賞する同国の代表的な監督。例えばサッカー・ファンの少女らを描いた『オフサイド・ガールズ』は、女性の置かれた不当な性差別社会の姿をコメディの形で鋭く問いかけた作品だ。宗教が政治を支配し、政治が文化や自由を抑圧する構造の社会では、おかしいと声を上げ、反対の意思表示をする者は制裁される。とりわけ影響力の大きいメディアや知識人、文化人らが狙われる。

パナヒ監督は2010年映画製作中に突然逮捕され、「イラン国家の安全を脅かした罪」により6年間の懲役、20年間の映画製作禁止、出国禁止、マスコミとの接触禁止の判決を受けた。収監の噂の流れる中で、世界各国の映画人、団体から抗議声明が出されている。そうした逆境の中で、自宅で撮影、作品化したのが本作である。画面には、その朝電話で呼び寄せた友人（モジタバ・ミルタマスブ監督）が撮影したパナヒ監督の姿、監督自身がiPhoneで撮った室内の映像、それに監督の過去の作品の断片といったものが映し出される。

冒頭、パナヒ監督が1人で朝食を食べている。薄いイラン風のパンにジャム、コーヒー。室内はゆったりと広く、ペルシャ絨毯を敷いた部屋は美しく整えられている。片隅の映像機材やスクリーンがなければ、普通の高級マンションといった

感じ。寝室の留守電には祭りで実家に帰っているらしい妻と娘からの、ペットと花の世話を頼むの伝言。ペットの巨大なイグアナは大人しくソファに寝そべったり、悠々と室内を移動していく。一見、何不自由ない暮らし？いや、不自由とは目に見えないものだ。ふと、かつて自宅軟禁中のアウンサンスーチーさんもこうだったのだろうか、と連想する。

ソファに座ってパナヒ監督はiPhoneで女性弁護士に裁判の行方をたずねる。時折、電話の音が聞こえないほどに外の音がうるさい。一瞬ここは市街戦の最中なのか、と錯覚する。実は「火祭り」の花火の音なのだ。突然玄関のチャイムが鳴り、上の階の女性が花火見物の間犬を預かって、と頼みに来る。しかし、あまりにも犬が吠えるので、閉口してすぐに返す。今度は、管理人の代理の青年がゴミを回収に来る…と、家庭内の雑事はけっこう忙しい。

パナヒ監督はそんな日常生活をこなしながら、呼び寄せた友人の監督を相手に当局の許可が出ずに作れなかった自作の映画の脚本を朗読し、絨毯の上にテープで家の間取りを再現し、映画について語りあう。だが、「言葉だけで映画は表現できるか。映画の偽りとは？」と考え込む。窓の外ではバトカーの音がうるさい。テレビをつけると、折しも日本の3.11の津波の映像が流れ、驚きの声を上げ、衝撃を受ける監督…。

俳優も脚本も演出も撮影現場もないので、「映画ではない」と（当局向けに）断りながら、そこにあるもの、話された言葉、聞こえてくる音、偶然訪れた人や犬の映像の断片を集めて、今逆境にあるパナヒ監督自身の世界を描き出している。困難を逆手に「映画監督とは映画を作る人間なのだ」との命題を見事に作品化した。その意思の力に感動せずにはいられない。

『これは映画ではない』

イラン映画（75分）／ジャファール・パナヒ監督、モジタバ・ミルタマスブ監督

シアター・イメージフォーラム他全国順次公開

© Jafar Panahi and Mojtaba Mirtahmasb

